オーストリアにおける迫害の記憶（1）

――ウィーンのユダヤ人広場プロジェクトをめぐって――

古　田　善　文

1.　はじめに

第二次大戦終結 50 周年にあたる 1995 年前後から、日本を含めた世界各地で大戦の記憶をいかに後世に残すかという試みが活発化している。

第二次大戦中、ヨーロッパを戦禍の渦に巻き込んだドイツや、ナチス・ドイツの一部として結果的に侵略戦争に加担したオーストリアでも、1990 年代中葉以降、戦争被害者やナチス犯罪被害者に対する追悼を目的とした大小様々な記念碑建設計画が、幾多の困難に直面しながらも確実に進展してきている。

ドイツでは、ベルリンの中心部(＝ブランデンブルク門近くのポツダム広場)に、ナチス・ドイツの手によって殺戮された 600 万人のユダヤ人を追悼する目的で建設がすすんでいる「ホロコースト警鐘碑（Holocaust-Mahnmal)」が最も有名である。2711 本ものコンクリート柱列からなるこの大規模なモニュメントは、ユダヤ系アメリカ人建築家 Peter Eisenman の作品で、通称「墓標の原野（Stelenfeld)」プランとも呼ばれている。その大胆な構想によって、この「警鐘碑」は着工前から多くの物議を醸したが、当初の計画から数年を経過した 2003 年の夏以降、その建設が本格化し、ようやく完成に向かいつつある[1)]。

筆者がこれまで研究対象としてきた隣国のオーストリアでも、ウィーン 1 区の中心部に、オーストリアのユダヤ人に対する迫害をモチーフとした警鐘碑(正式には「ショア警鐘碑（Schoa-Mahnmal)」）を建設する計画が、1994 年末以降具体化し、こちらはベルリン・プロジェクトより一足先の 2000 年 10 月に完成している。

この小稿の課題は、ベルリンに先立って完成したウィーン・ユダヤ人広場（Judenplatz）の「ショア警鐘碑（以下、警鐘碑）」計画の発端から完成までの道筋を追いながら、過去の負の記憶（= オーストリアにおけるユダヤ人迫害）を後世に残そうとする営みが、その立案・実行過程でどのような問題に直面し、当事者達はこうした問題をどのように克服していったのかを具体的に検討することである[2)]。

具体的なユダヤ人広場プロジェクトの紹介に入る前に、次章ではまず準備作業として、オーストリアにおけるナチスによるユダヤ人迫害の経緯を簡潔に整理しておく必要がある。

2. 両大戦間期オーストリアにおけるユダヤ人迫害

1934 年 3 月 22 日に実施された人口統計調査によれば、オーストリアには 19 万 1,481 人（内、首都ウィーンに 17 万 6,034 人）のユダヤ人（= ユダヤ教徒）が暮らしていた。この数は、1938 年 3 月のアンシュルス（Anschluss: ドイツ軍の侵攻によって達成されたドイツとオーストリア第一共和国の合邦）までに幾分減少している。公式統計資料によれば、アンシュルス時点で、登録ユダヤ人口は 18 万 1,882 人（ウィーン = 16 万 7,249 人）となる[3)]。

アンシュルス直後から、ナチスによる、オースリアのユダヤ系市民に対する広範な迫害が始まることになった。ユダヤ人主要団体のリーダーたちは逮捕され、その一部はドイツのダッハウ（Dachau）へと強制送致され、殺害された。略奪者はウィーンのシナゴーグ（ユダヤ教会）を破壊し、ナチ党員はユダヤ系学生がウィーン大学に足を踏み入れることを妨害した。多くのユダヤ系市民は路上で拉致され、衆人監視のなかで舗装道路を歯ブラシで磨くように強要された。その他、ユダヤ人商店のボイコット行動や、非ユダヤ系市民による暴力行為も頻発した[4)]。

ナチス親衛隊のなかで「ユダヤ人問題」専門家とみなされていた Adolf Eichmann が、ユダヤ人に対する国外退去計画を実行するためウィーンに派遣された 1938 年 8 月を境にして、ユダヤ人の国外亡命の動きが活発化した。平

均して毎月 8,000 人のペースで、ユダヤ人は財産を残したままオーストリアを離れることになった。こうして、18 万人のオーストリアのユダヤ人のうち、12 万 8,500 人が Eichmann の介入後、国外亡命を余儀なくされた。かれらが向かった主な亡命先と人数は、イギリスの 3 万人、アメリカ合衆国の 2 万 8,600 人などであった。パレスチナにも 9,000 人強が移住した。他の欧州諸国も 2 万 4,500 人のユダヤ人を受け入れたが、ドイツとの戦争が始まってその国土がドイツ国防軍に占領されると、亡命ユダヤ人の多くは、新しい「ユダヤ人政策」を開始した Eichmann の命令によって、今度は「絶滅収容所」へと送致されることになった[5)]。

最終的に、オーストリアでは 6 万 5,000 人のユダヤ系市民がヨーロッパの収容所などで殺害されたとされる。戦闘が終結した 1945 年 4 月の時点で、ウィーン市内で迫害を生き延びたユダヤ人は 5,512 人を数えたに過ぎなかった。ちなみに、現在、ウィーンのユダヤ文化協会に登録されているユダヤ人の数は 1 万人前後とされる[6)]。

3.　警鐘碑建設の過程と問題

1）　発　端

ウィーンにおける警鐘碑論争のそもそもの発端となったのは、オーストリアの著名な芸術家 Alfred Hrdlicka（1928 年ウィーン生まれ）が[7)]、アンシュルス 50 周年を記念して、オペラ座の裏手にあるアルベルティーナ広場（Albertinaplatz）に、「戦争とファシズムに対する警鐘碑（Mahnmal gegen Krieg und Faschismus）」を創った（作業期間：1988–91 年）ことだった。広場を席巻するこの巨大なモニュメントは、戦争とファシズムの悲惨さを見る者に十分に伝えてはいるが、ウィーンのユダヤ人団体の間では、このモニュメントの中心部に位置された小さな「道路を洗うユダヤ人像」が問題とされた（写真 1，2 参照）。

写真 1　アルベルティーナ広場と「戦争とファシズムに対する警鐘碑」、広場中央に「道路を洗うユダヤ人像」が見える。2004 年 6 月筆者撮影

写真 2　赤ペンキで汚された「道路を洗うユダヤ人像」2004 年 5 月筆者撮影

何故、この像が問題視されたかと言うと、多くのユダヤ人にとって、石畳の上に屈辱的な姿勢で這いつくばっているこの像は、ユダヤ人の尊厳や誇りを表すものでは毛頭なく、むしろ自分たちの父祖を卑下する姿に映るからであった。それ以上に、ユダヤ人側から問題視されたのは、これが「誰のための警鐘碑か ?」という点であった[8)]。

当時の多くの写真資料が物語っているように、1938年3月のアンシュルス直後のウィーンでは、多くのユダヤ人が屈辱的な道路掃除を強要されたが、そうしたユダヤ人の周りには常にかれらを取り巻くナチス党員と野次馬のウィーン市民が存在していたのである。つまり、このユダヤ人像が、直接的な加害者や傍観者、つまり当時のウィーン市民の行動を戒めるためのものならば、当然、そこには群集を暗示するシンボルが不足している、というのが多くのユダヤ人団体の反論であった。

こうした意見を背景に、“ナチ・ハンター”として「戦うユダヤ人」のシンボル的存在である Simon Wiesenthal（当時86歳）[9] が、1994年の年末から95年年頭に放送されたラジオ番組のなかで、Hrdlicka のユダヤ人像を撤去し、これに代わる新たなユダヤ人迫害警鐘碑の作成を訴えたのである。この訴えに、社会民主党（SPÖ）のウィーン市長 Michael Häupl が賛同したことによって、ここにあらたなホロコースト警鐘碑建設計画が誕生することになった。

当初、Wiesenthal は、ナチスによって殺害された6万5,000人のユダヤ人殉難者全員の名前を刻印した石壁の作成を意図していたとされるが、「オーストリア抵抗問題資料館（Dokumentationsarchiv des österreichischen Widerstandes）」の調査によって、該当者の約半数の名前・死亡地・死因が不明であるということが判り、これを断念している。あわせて、警鐘碑の建設地もウィーンのユダヤ人迫害と歴史的に関係の深いユダヤ人広場に決定された[10]。

2）　ユダヤ人広場の歴史

ここでは、ウィーンのプロジェクトの真意を理解するためにも、ユダヤ人広場がもつ歴史的意味について若干補足する必要があろう。

ウィーンに最初のユダヤ人が居住したとされるのは12世紀の末頃である。当時のユダヤ人は、都市に定住するためには、時の為政者に金を支払い、その見返りにユダヤ人保護状（Judenschutzbriefe）を発行して貰う必要があったが、1238年にバーベンベルク家の皇帝 Friedrich II がウィーンのユダヤ人にもこの方針を適用したため、同家の宮殿があった現在のアム・ホーフ（Am Hof）

広場に近接するユダヤ人広場を中心に、ウィーンに居住するユダヤ人の数は増加していくことになる[11)]。

1246年にバーベンベルク家が断絶した後、オーストリアは1273年以降ハプスブルク家の時代を迎える。新時代に入り、ウィーンのユダヤ人広場に居住するユダヤ人が困難な状況に直面したのは、1420年から1421年にかけてであった。この年、キリスト教徒が抱く宗教的な反ユダヤ感情（Antijudaismus）と経済的利害関心を背景として、ウィーンでは大規模なユダヤ人追放（いわゆる「ウィーンの大災厄（Wiener Gesera）[12)]」が発生し、ユダヤ人街の大火災とそれに続いた略奪行為は、ユダヤ人社会の存在基盤を決定的に破壊した。この災厄の概要は以下のとおりである。

当時、激しさを増したフス教徒との戦いのなかで、ウィーンのユダヤ人がフス教徒を支援していると考えた時の支配者、Albrecht V（後の国王 Albrecht II）は、ユダヤ教徒にカトリックに改宗することを強要した。ユダヤ人広場にあったシナゴーグに監禁されたユダヤ社会のメンバーは、逃げ場のない状況に絶望し、1420年秋、女子供を含めてシナゴーグ内で集団自殺し、建物も最後に残ったユダヤ人ラビ（Rabbi Jona）の手によって火を放たれ燃え尽きた。シナゴーグと運命をともにしなかったユダヤ人にも過酷な運命が待っていた。裕福なユダヤ人は、財産を没収された後、さらに改宗への意志と財産の隠し場所を告白するよう過酷な拷問を受けた。最後まで改宗を拒否した200人の裕福なユダヤ人達は、1421年3月12日、現在のウィーン3区のエルトベルク（Gänseweide in Erdberg）で、生きたまま公開の火炙りの刑に処されたのであった。財産を持たないユダヤ人は、舵なしの船に乗せられドナウ河をハンガリーまで漂流する憂き目にあった。この時のユダヤ人コミュニティーの徹底的な破壊の後、150年にわたってウィーンにはユダヤ人は一人も居住することはなかったと言われている[13)]。

現在のユダヤ人広場には、この事件の名残をとどめる史跡も残っている。それはユダヤ人街最古の建物のひとつであるユダヤ人広場2番の「ハウス・ツム・グローセン・ヨルダン（Haus zum grossen Jordan）」である。1421年

当時、この建物は、Hocz という名前のユダヤ人に属していたが、1427 年にウィーン市民の Georg Jordan によって建て替えられたと言われている。この建物の正面には、ヨルダン川でのキリストの洗礼を模したレリーフ（1520 年頃の作）が存在しているが、興味深いのは、そこに 1421 年のウィーンのユダヤ社会の破壊を暗示する反ユダヤ的な銘文がラテン語で刻印されていることである（写真 3 参照）[14)]。

写真 3　「ヨルダン・ハウス」のキリスト洗礼レリーフと反ユダヤ的銘文、2004 年 6 月筆者撮影

つまり、ユダヤ人広場にナチスによるユダヤ人迫害をイメージする警鐘碑を追加建設することは、問題をナチス期に限定することなく、中世のユダヤ人迫害の歴史を現代のホロコーストに重ね合わして提示することを意味している。偶然とはいえ、ここにわれわれは、ベルリンの「ポツダム広場プロジェクト」の製作責任者である Eisenman（彼は同時に「ユダヤ人広場プロジェクト」の候補者の一人でもあった）が持論としている概念――「時間と空間における記憶の網」や「記憶の重層化」という概念――のひとつの優れた実践例を垣間見るのである[15)]。

一方、中世のユダヤ人迫害と密接に結びつくこの広場には、ユダヤ人への寛

容と謝罪を意味するオブジェも存在する。そのひとつは、ドイツ啓蒙思想家としてユダヤ人に対する寛容的な対応を説いたことでも有名な Gotthold Ephraim Lessing のブロンズ像である。とは言っても、これは 1968 年に Siegfried Charoux の手によって作られた二代目の銅像が、1982 年に、ユダヤ人広場の本来の位置に戻されたものである。話は少々複雑だが、初代の銅像は、同じく Charoux が 1935 年に作製したものであったが、こちらの像は 1939 年にナチスによって破壊されるという数奇な運命を辿っている[16)]。

もうひとつのユダヤ人に対する謝罪は、1998 年 10 月にウィーンのカトリック教会が、ユダヤ人広場 6 番の建物正面に掲示した銘文にみられる。そこには、中世のユダヤ人迫害と 20 世紀のショアに対するカトリック教会の共同責任がはっきりと明記されている[17)]。この広場の歴史的背景の複雑さが、これらのオブジェからも十分に理解される。

3） 経　過

以下、プロジェクトが具現化する過程を、責任者の Wiesenthal の著作をもとに整理しておこう。

1995 年 1 月、Wiesenthal のイニシアティブによって、警鐘碑建設プロジェクトを実現させるため、ユダヤ人団体関係者、歴史家、建築家らが参加した「実行委員会」が結成された。主要なメンバーは、「在オーストリア・ユダヤ文化協会全国連盟会長」Paul Grosz、「オーストリア抵抗問題資料館」長 Wolfgang Neugebauer、「政治啓蒙協会」Erika Weinzierl、「オーストリアの反ユダヤ主義に対して行動する会」Evelyn Adunka などであった[18)]。

1995 年 1 月 25 日の第 1 回会議以降、数回の審議を経て、委員会は、ベルリンのポツダム広場警鐘碑プロジェクトで顕在化した問題点――公募形式のため 500 点以上の応募作品が殺到し選考が難航した――に考慮し、最終的にウィーンの警鐘碑を作成する候補者をあらかじめ以下の 9 氏に絞ることを決定した。それは、Valie Export、Karl Prantl、Zbynek Sekal、Heimo Zobernig（以上、オーストリア）、Zvi Hecker（イスラエル）、Clegg & Guttmann、Peter

Eisenman（以上、アメリカ合衆国）、Ilja Kabakov（ロシア）、Rachel Whiteread（イギリス）の面々であった。かれらに送られた依頼書の中には、ウィーン1区のユダヤ人広場が警鐘碑の建設地と明記され、さらに作品がこの広場にある他の建築物と調和することが要請されていた。基本計画では、さらにナチに殺害されたオーストリアのユダヤ人6万5,000人を記憶にとどめることを目的とした銘文と、かれらが殺害された収容所名が警鐘碑に刻印されることも決定されていた[19]。

こうした動きに連動する形で、建築家 Hans Hollein を長とする国際審査委員会も結成された。他の審査委員会メンバーは、ウィーン市長 Michael Häupl をはじめ、発起人の Simon Wiesenthal、ウィーン市文化参事官 Ursula Pasterk、ウィーン市都市計画参事官 Hannes Swoboda、「ユダヤ文化協会」Sylvie Liska、「ベルリン・ユダヤ博物館」館長 Amon Barzel、「ニューヨーク現代美術館」館長 Robert Storr などであった[20]。

1995年9月初旬には、プロジェクトに参加する候補者9名全員に、11月20日までにプロジェクト・プランを提出することが要請され、その間、候補者はウィーンに招待されて建設予定地（ユダヤ人広場）を視察する機会を得た。こうした手順を経て、1996年1月23日、ウィーン市庁舎で候補者全員が審査委員会に自作品のプレゼンテーションを2日間にわたって実施することになった。詳細な議論を経たのち、審査委員会は満場一致でロンドン在住のイギリス人芸術家 Rachel Whiteread（1963年ロンドン生まれ）の作品を候補作に選出した。彼女の作品のモティーフは、「ユダヤ人を本（＝知性）の民」と規定したもので、具体的には、「喪失感や空虚さ」を表すデザインとして、コンクリート製の箱型の建築物（幅7m、奥行10m、高さ3.8m）の四方の外壁に書架と、二度と開かれることのない閉じられたままの書籍があしらわれている（写真4）[21]。

写真 4 「ショア警鐘碑(正面)」、2004 年 6 月筆者撮影

1996 年春、Whiteread の作品のモデル[22]と、ウィーンのユダヤ人広場プロジェクトの概略は、ウィーンの“クンスト・ハレ”で一般公開された後、さらに、イスラエルとロンドンでも紹介され、国際的な関心を集めていくことになる[23]。

4) 反　論

警鐘碑が最終的に完成したのは、2000 年 10 月 25 日のことであった。これは、当初、実行委員会が希望した完成予定日の 1996 年 11 月 9 日――「ポグロムの夜（Pogromnacht)」58 周年記念日――からは、およそ 4 年近い遅れであった[24]。

プロジェクトの進展が大きく遅れた最大の原因は、警鐘碑建設予定地であったユダヤ人広場から、予備調査(1995 年夏)の段階で、中世に破壊された件のシナゴーグの大規模な遺跡が発掘されたことであった。

また、Whiteread の作品が最終候補作として決定された後、警鐘碑の実態と規模が市民に明らかになるにつれ、多方面から反対の声が出はじめたことで

あった（1996 年 5 月以降）。

以下では、こうしたプロジェクトに対する反対意見を整理しながら、ウィーンにおけるユダヤ人問題の複雑な構造を検証してみよう。

政治的な関心から反対意見を唱えたのは、親ナチス的発言で多くの物議を醸してきた Jörg Haider をはじめ、党内に右翼ポピュリズム的・排外主義的体質を抱える自由党（FPÖ）であった。ウィーンでは野党として社会民主党市政を強く批判するこの党が、近隣住民の不安（商売上、治安上）を巧みに利用しながらこの問題を政治的争点にしたのは至極当然のことであった。

実際、社会民主党は、1996 年 10 月のウィーン市議会選挙で、躍進を遂げた自由党とは対照的に議席数を減らしたため、これまでの単独市政を解消して 11 月には保守派の国民党（ÖVP）との連立を組むことを余儀なくされた[25)]。

当時の近隣住民と自由党の反対行動の様相を、Wiesenthal は次のように記している。

「プレゼンテーションの終了直後から自由党サークルから批判的な声が聞こえるようになった。かれらは、近隣住民の名前を借りて、ユダヤ人広場前や周辺住人が自分たちの意見を問われることがなかった、との批判を展開した。ある住民集会では――そこでは鉄骨のかたちをした記念碑のモデルがその大きさを説明する事になっていた――どちらかと言えば低水準の、反ユダヤ主義的発言も含めた反応があらわれた。記念碑に対して起こりうる破壊行動への不安も引き合いに出された。その他にも、コンクリートの塊が醜いという意見や、バロック様式の建築物に囲まれた広場にそぐわないという意見もあった。自由党の一人は、『住民の』承認が得られてないことを理由に、この集会をウィーンの文化委員会で警鐘碑について改めて議論するきっかけに利用しようとした。[26)]」

こうした自由党の政治家や近隣住民の反発もさることながら、警鐘碑プロジェクトの進展にとって最大の障壁となったのは、本来、このプロジェクトを推進する側に立っていたはずのウィーンの「ユダヤ文化協会」の一部から出された思いがけない「反対」であった。彼らの反対の理由は、先に述べたユダヤ人広場の地下に埋まっていた中世のユダヤ教会の存在と関係していた。

警鐘碑建設に先駆けて始まったユダヤ人広場の発掘調査がすすむにつれ、埋もれていたシナゴーグの遺跡の保存状態が極めて良い(神聖な祭壇（Bima）の他、集団自殺の証拠となる血痕の残る床石も発見された)ことが判ってきた。その結果、調査終了後も地下の遺跡は埋め戻すことなく、地上の警鐘碑と連係させて保存することが決定された。この流れをうけて、1996 年夏には、ウィーンの NPO 団体「追放ユダヤ人支援サービス（Jewish Welcome Service)」の所長 Leon Zelman が、地上のコンクリートの建造物よりも地下の発掘遺跡そのものを警鐘碑とする方がふさわしいとする持論を展開した。これを契機として、ユダヤ人広場のかわりに王宮前の英雄広場（Heldenplatz）を警鐘碑建設候補地として再検討する案などが一部の政治家から出されたが、警鐘碑の作者 Whiteread は、自分の作品はあくまでユダヤ人広場を前提としていることを強調し、この申し出を拒否した[27)]。

最大の問題となったのは、当初予定されていた警鐘碑の直下にシナゴーグの最も神聖な祭壇（Bima）が重なることであった。これに対して、「ユダヤ文化協会」の一部のメンバーは、1998 年 1 月 16 日に警鐘碑建設に対して反対の見解を表明した[28)]。

各方面からのこうした反対の動きにあわせて、これまで、その作品を Wiesenthal に批判されてきた「アルベルティーナ広場プロジェクト」の製作者 Hrdlicka からの反論もあった。彼は、Whiteread の作品プランをこの「醜悪な警鐘碑（= Hrdlicka 発言)」は、いずれにしても、自分と自分の作品に対する中傷として受け取っていた[29)]。Hrdlicka　以外にも、芸術的観点から Whiteread の作品を批判する声もあった。1996 年 7 月、オーストリア人画家の Arik Bauer は、警鐘碑を「化け物の墓石」、「芸術性に欠け醜悪」と呼び、「これが広場を数百年にわたって醜くし、反ユダヤ主義に正当な根拠を与えることになる」と批判した[30)]。

この間、警鐘碑建設推進派のリーダーである Wiesenthal は、ウィーン市当局にユダヤ人広場における警鐘碑建設の開始を要請した(1997 年 4 月)。一方、市文化局とウィーンのユダヤ博物館他の主催で「記念碑、警鐘碑、ショア、記

憶」と題するシンポジウムが開かれ、ユダヤ人広場への警鐘碑建設の是非が公開の場で議論された（1997 年 1 月）。このように、地下のシナゴーグ遺跡の発掘調査が継続された 1996 年夏から 1998 年初頭にかけては、警鐘碑の形態や建設位置をめぐって混沌とした状況が続いたのである[31)]。

5）帰　結

転機となったのは、1998 年 2 月 18 日、ウィーンの「ユダヤ文化協会」内で作者の Rachel Whiteread を交えて、警鐘碑建設位置についての協議が行われたことであった。この協議の場で、地下の祭壇の真上に建築物がかからぬよう、当初の計画から 1 メートルだけ警鐘碑の位置をずらすことが確認され、建設計画当事者間の妥協が図られた[32)]。

最大の懸案事項が解決されたことを受けて、その後、警鐘碑建設問題は一挙に解決に向かった。1998 年 3 月 3 日、ウィーン市長の Häupl と当時の市文化参事官 Peter Marboe によって、警鐘碑が 1 メートルの位置変更をともなうかたちで、当初の予定どおりユダヤ人広場に建設されることが最終的に決定された。1998 年 6 月 24 日には、市議会がユダヤ人広場プロジェクト（地上の警鐘碑建設、地下の中世のシナゴーグ発掘・保存、新設博物館ゾーン整備）のための総予算を 1 億 3,000 万シリング（約 10 億円）とすることを決定し、政治的には最終的な決着をみた。

同年 9 月 28 日の定礎式を経て本格的に始まったユダヤ人広場プロジェクトは、2000 年 10 月 25 日の警鐘碑除幕式をもって完成した。[33)]

4.　記憶の舞台

ウィーンのユダヤ人広場を訪れた者は、まず広場の北側に位置する箱型のコンクリート製の建造物に目を奪われることになる。

この警鐘碑が乗る土台の正面には、当初の計画通り「1938 年から 1945 年にかけて国民社会主義によって殺害されたオーストリアのユダヤ人に捧げる」という意味の碑文がドイツ語、英語、ヘブライ語で記されている。さらに警鐘碑

が乗る土台の四辺にはオーストリアのユダヤ人が殺害された 45 の強制収容所や絶滅収容所の名前が刻印(アルファベット順に Auschwitz から Zamosc まで)されている。

広場北側の角のユダヤ人広場 8 番地の通称“ミスラヒ・ハウス(Misrachi-Haus am Judenplatz 8)”の地下には小規模ながら優れた内容を誇る新設のユダヤ博物館[34]が設置されている。そこには、中世の破壊されたシナゴーグの発掘作業の過程で集められた多様な発掘物や、シナゴーグの模型などが陳列され、さらに CG 映像でウィーン中世のユダヤ人コミュニティーの様子を追体験できるコーナーも備えられている[35]。

圧巻は、博物館の地下通路を伝って訪れる破壊された地下シナゴーグの遺跡である。階段をのぼると、訪問者はシナゴーグの中央部に突然足を踏み入れることになる。ほの暗い地下空間に浮かびあがる遺跡では、警鐘碑建設時に問題となった神聖な祭壇跡や石壁などを間近に見ることができ、このシナゴーグの来歴を事前に知る訪問者は、必然的に中世のユダヤ人迫害の様子を脳裏に思い浮かべることになる。

このように、ユダヤ人広場は、オリジナルな史跡(ヨルダン・ハウスの「反ユダヤ・レリーフ」や「レッシング像」、地下の破壊された「シナゴーグ跡」)に、新たに建設・設置されたエレメント(ユダヤ人広場博物館、「ショア警鐘碑」、「カトリック教会の謝罪碑」)などが追加アレンジされた場所であり、そこでは中世から現代にいたるウィーンのユダヤ人迫害をテーマとした記憶が重層的かつ立体的なイメージで認識されるのである(写真 5 参照)。

以上、紹介してきたユダヤ人広場プロジェクトは、規模や予算のうえではベルリン・ポツダム広場のホロコースト警鐘碑には遠くおよばないものの、過去の多様な記憶をつなぎとめ、さらに後世に伝えていくことを目的とする記念碑としては高い完成度を誇っている。Wiesenthal の問題提起から、ウィーン市民、マスコミ、芸術家、考古学者、ユダヤ人団体、政党を巻き込んだ多様な論争のなかで、幾つかの計画修正を経ながらもプロジェクトが最終的に完成にまでこぎつけたことは注目に値する。プロジェクト建設の意義について最後まで

写真 5　ユダヤ人広場鳥瞰写真、「ショア警鐘碑（裏面）」から奥に「レッシング像」、「ヨルダン・ハウス」を望む。2004 年 6 月筆者撮影

強い確信を持ち続けた賛成派に対して、筆者は深い敬意を表するものである。

そうしたプロジェクト推進側の主要メンバーのひとりであるウィーン市長 Häupl は、同市が発行している啓蒙冊子のなかで、オーストリアのユダヤ人に対する過去の迫害の事実を記したうえで、ユダヤ人広場プロジェクトを含めた記念・啓蒙活動の重要性を次のように述べている。

「ウィーン市は、この歴史的責任に直面し、記念・啓蒙活動を通じて、こうした過去の出来事が徹底的に論議され、決して忘れられることのないように貢献することをめざす。二つのユダヤ人博物館と、ユダヤ人広場の警鐘碑、そしてあの“戦争とファシズムに反対する警鐘碑”は、目に見える標識のいくつかにすぎない。[36)]」

もちろん、ユダヤ人広場の警鐘碑をめぐって、問題がない訳ではない。とくに、ユダヤ人広場に警鐘碑を建設する発端となったアルベルティーナ広場の「道路を洗うユダヤ人像」に投げかけられた疑問、「これは誰の何に対する警鐘碑なのか ?」に、Whiteread の作品は解答を提示しえたのだろうか。

ある研究者は、このユダヤ人広場の警鐘碑が抱える最大の問題点を次のように表現している。

「この警鐘碑は誰のために造られたのか？　鎮魂のより所としてユダヤ人に与えられたものなのか？　あるいは、自分達の歴史が抱えるおぞましい一時期を記憶するためにオーストリア人に与えられたものなのか？　これは犠牲者を追悼するために役立つのか、それとも集団の罪に対する自白なのか？　ユダヤ社会内で互いに連動してはいなかったが、次第に声高になった要求――発掘遺跡（シナゴーグ）だけが『警鐘碑』として機能すべきだ――を通じて、最終的に次のような疑問が強くなった。その疑問とは、『ナチ・ホロコーストは他に類を見ないものであり、それゆえ単一の出来事として記憶にとどめ置かれるべきなのか。それとも、ナチ・ホロコーストは、数百年におよぶポグロムや迫害の頂点を表しているのであり、それゆえ、追悼は歴史的プロセスの継続面を強調すべきなのか』という問いかけである[37)]」

この問いかけに対して、筆者の私見を述べてみよう。

Whiteread の作品は、当初、あくまでホロコースト犠牲者を追悼する目的で計画されたのである。しかし、この警鐘碑は、ウィーンの郊外ではなく、観光客も含めて多くの人々が行き交うウィーン 1 区の真ん中に位置し、まさに中世のユダヤ人迫害の記憶が生々しく残されたユダヤ人広場に建設された。そのためこの記念碑は、本来与えられていたホロコースト犠牲者の「墓石」という役割を担うだけではなく、中世と現代のユダヤ人迫害を結びつける総合モニュメントの一部としてこの場所になくてはならない存在となった。例えば、建設地をめぐる論争のなかで、ウィーンの政治家や近隣住民がゲシュタポ本部のあったモルチン広場（Morzinplatz）を代替地に挙げたことがあったが（1996 年 7 月）[38)]、もしこの代替案が認められていたら、警鐘碑はまさにナチスとホロコーストの問題に限定されたシンボルになったと推測される。

ところで、こうした建設位置をめぐる論争のなかに、近年問題にされ始めた戦後のオーストリア人の歴史認識[39)]が見え隠れしていると指摘するのは言いすぎだろうか。つまり、ユダヤ人迫害をナチス・ドイツの問題に限定する限りに

おいて、公式にはドイツに「侵略された」歴史をもつオーストリアは、「犠牲者」として、加害者の役回りから逃れることが可能なのである。

警鐘碑建設問題が起きた時、Wiesenthal が候補地として真っ先にユダヤ人広場を想定したことは決して偶然ではない。この広場を意図的に警鐘碑の建設地に選ぶことによって、Wiesenthal は、中世のユダヤ人迫害の歴史と重ね合わせながら、オーストリアにおける反ユダヤ主義の歴史的連続性とその帰結を思い起こさせようとしたのであろう。

本稿では、ユダヤ人に対する過去の迫害の事実を、現代に暮らす人々はどのように受け止め、この負の記憶をどのような形で残そうとしているのかについて、主としてウィーンの事例を中心に紹介・検討してきた。しかしながら、ユダヤ人迫害の事例を検討するだけでは、オーストリアの記憶文化・政策のすべてを論じたことにはならない。例えば、ナチスによって迫害されたのはユダヤ人だけではなく、周知のようにシンティ（Sinti）・ロマ（Roma）族に対する迫害の事実も看過されるべきではない。ここでは概略的に述べるにとどめるが、当時のオーストリアで「ジプシー」と呼ばれた人々は、約 1 万 1,000 人にも及んだが、ナチス統治時代を生き延びたのはそのうち僅か 1,500 人から 2,000 人に過ぎないのである[40)]。

ウィーンの行政府および市民は、こうしたシンティ・ロマに対する過去の迫害の事実をどのように受け止めてきたのか、また現在、彼らはどのようにこの問題と向き合おうとしているのかを、ウィーン 10 区のバランカ公園（Baranka-Park）の記念碑建設をめぐるエピソードを素材にしながら、別稿であらためて比較検証してみたい。

註

1）　最近の新聞報道では、プロジェクト完成は戦争終結 60 年目となる 2005 年 5 月の予定である。„Richtfest am Berliner Holocaust-Mahnmal“, in: *Die Welt*, 13.Juli 2004. 柱 1 本は幅 2.38 m、奥行 95 cm、高さは 20 cm から 4.7 m まで様々である。Mario Kaiser, „Das deutsche Feld“, in: *Der Spiegel*, Nr. 52, 2004, S. 63. なお、この計画の全貌については以下を参照。Sibylle Quack（Hrsg.）, *Auf dem Weg zur Realisierung. Das*

Denkmal für die ermordeten Juden Europas und der Ort der Information. Architektur und historisches Konzept, Stuttgart, München, 2002.

2） 筆者は 2004 年 3 月末から 2005 年 3 月末まで獨協大学から国外長期研修の機会を得、ドイツ連邦共和国とオーストリア共和国に滞在した。本稿で使用する写真はその際筆者が撮影したものである。また、本稿は獨協大学特別研究助成による共同研究「ポスト・ヒトラーの政治文化」の成果の一部である。

3） Clemens Jabloner u. a.（Hrsg.）, *Schlussbericht der Historikerkommission der Republik Österreich. Vermögensentzug während der NS-Zeit sowie Rückstellungen und Entschädigungen seit 1945 in Österreich. Zusammenfassungen und Einschätzungen*, Wien, München, 2003, S. 85f. ただし、アンシュルス後、旧オーストリア領にドイツの「ニュルンベルク法」が適用されると、ナチスがユダヤ人と規定した者の数は、20 万 1,000 人から 21 万 4,000 人に増加した。Jabloner（Hrsg.）, *a. a. O.*, S. 87. なお、1930 年代から 40 年代のユダヤ社会に関する詳細な人口統計学（Demographie）的研究書として以下がある。Jonny Moser, *Demographie der jüdischen Bevölkerung Österreichs 1938–194*5, Wien, 1999.

4） Martin Gilbert, *Das jüdische Jahrhundert*, München, 2001, S. 177.

5） Ebenda, S. 180.

6） 以上の数値は、Evelyn Adunka, „Niemals abgesichert“, in: *Profil*, Nr. 30, Jg. 21, Juli 2003, S. 123. より。

7） Hrdlicka は 1928 年 2 月 28 日ウィーンで生まれた。1946 年から 57 年にかけてウィーンの美術工芸大学で学んだ後、1964 年にヴェニスのビエンナーレにオーストリア代表として参加。その後シュトゥットガルト（1971–73 年、1975–1986 年）、ハンブルク（1973–1975 年）、ベルリン（1986–1989 年）、ウィーン（1989 年–）で教授職を歴任している。http://www.aeiou.at/aeiou.encyclop.h/h922680.htm を参照。

8） Doron Rabinovici, „Der Spiegel der Finsternis. Schattenspiele oder: Die richtige Art des Erinnerns“, in: Simon Wiesenthal（Hrsg.）, *Projekt: Judenplatz Wien*, Wien, 2000, S. 32.

9） Wiesenthal は 1908 年 12 月 31 日、旧オーストリア＝ハンガリー帝国統治下の Buczacz（現ウクライナ領）で生まれたユダヤ人で、氏自身が 1945 年にアメリカ軍によって解放されるまで、数箇所の強制収用所を生き延びたホロコーストの生き証人である。氏を世界的に有名にしたのは、なによりもナチ戦争犯罪人 Adolf Eichmann の逮捕に際して重要な役割をはたしたことである。1977 年、氏はウィーンにナチス犯罪を調査・記録する目的で „Simon Wiesenthal Center“ を設立し、ナチス犯罪者の追及に半生を捧げた。2003 年 4 月に氏は現役引退を表明、2004 年 2 月にはイギリスより「人類に対する生涯の奉仕」を理由にナイトの称号を受けている。以上は、http://en.wikipedia.org/wiki/Simon_Wiesenthal を参考にした。

10） 以上、Simon Wiesenthal, „Das Mahnmal am Wiener Judenplatz. Die Idee, der Standort, die Kontroverse, das Resultat“, in: Wiesenthal（Hrsg.）, *a. a. O.*, S. 9–11. 参照。

11） Julia Kaldori（Hrsg.）, *Jüdisches Wien, Jewish Vienna*, Wien, 2004, S. 54.

12） Gesera は、ドイツ語では Verhängnis（凶運、破滅）と訳される。Shlomo Spitzer, „Jüdische Lebens- und Leidensgeschichte am Judenplatz“, in: Wiesenthal（Hrsg.）, *a. a. O.*, S. 196.

13） 以上の記述は次の文献を参考にした。Reinhard Pohanka, „» . . . keinen Sitz, Haus noch Niederlaß . . . «. Der Judenplatz in Wien. Eine Geschichte“, in: Wiesenthal（Hrsg.）, *a. a. O.*, S. 120f; Kaldori, *a. a. O.*, S. 54; Spitzer, *a. a. O.*, S. 196f.

14）原文のドイツ語訳は次のとおりである。
„Durch die Fluten des Jordan wurden die Körper von Schmutz und Übel gereinigt. Alles weicht, was verborgen ist und sündhaft. So erhob sich 1421 die Flamme des Hasses, wütete durch die ganze Stadt und sühnte die furchtbaren Verbrechen der Hebräerhunde. Wie damals die Welt durch die Deukalionischen Fluten gereinigt wurde, so sind durch das Wüten des Feuers alle Strafen verbüßt.“（下線筆者）
aus: Pohanka, *a. a. O.*, S. 126f. レリーフが作成された推定年代については以下を参照した。Traude Veram, *Das steinerne Archiv. Der alte Judenfriedhof in der Rossau*, Wien, 2002, S. 86.
15）Peter Eisenman, „Prolog: Das Denkmal und die Erinnerung nach dem 11. September 2001“, in: Sibylle Quack（Hrsg.）, *a. a. O.*, S. 28ff.
16）Kaldori, *a. a. O.*, S. 51f.
17）Ebenda, S. 51.
18）Wiesenthal, *a. a. O.*, S. 10.
19）Ebenda, S. 11.
20）Ebenda, S. 12.
21）Ebenda, S. 13; http://hirshhorn.si.edu/collection/gallery/whiteread.html ここに提示したサイズは、Gerhard Milchram（Hrsg.）, *Judenplatz. Ort der Erinnerung*, Wien（ohne Jahrgang）, S. 31, Anm. 11 の数値による。
22）Whiteread の過去の作品およびユダヤ人広場プロジェクトのコンセプトについては以下を参照。Andrea Schlieker, „»Ein Buch muss die Axt sein für das gefrorene Meer in uns«. Rachel Whitereads Holocaust-Mahnmal“, in: Wiesenthal（Hrsg.）, *a. a. O.*, S. 39–70.
23）以上は、Wiesenthal, *a. a. O.*, S. 13f.
24）Ebenda, S. 13.
25）Schlieker, *a. a. O.*, S., 56f.
26）Wiesenthal, *a. a. O.*, S. 14.
27）Ebenda, S. 14ff.
28）„Chronik Judenplatz“, in: Wiesenthal（Hrsg.）, *a. a. O.*, S. 250.
29）Wiesenthal, *a. a. O.*, S. 15.
30）Schlieker, *a. a. O.*, S. 52.
31）Wiesenthal, *a. a. O.*, S. 16ff.
32）Schlieker, *a. a. O.*, S. 61f.
33）„Chronik Judenplatz“, *a. a. O.*, S. 250ff; Wiesenthal, *a. a. O.*, S. 18ff.
34）詳しくは以下を参照。Gerhard Milchram（Hrsg.）, *Museum Judenplatz. Zum mittelalterlichen Judentum,* Wien（ohne Jahrgang）. なお、ユダヤ人広場の博物館建設以前の 1993 年 11 月、ウィーンの Dorotheergasse 11 番に、「ウィーン・ユダヤ人博物館（Das Jüdische Museum Wien）」が建設されている。
35）Broschüre: *Jüdisches Museum Wien*. 2003/2004.
36）Stadt Wien（Hrsg.）, *Jüdisches Wien — Erbe und Auftrag*, Wien（ohne Jahrgang）, S. 1.
37）Schlieker, *a. a. O.*, S. 58（引用内引用は、Ian Traynor, *The Observer*, 6. Oktober 1996）.
38）Schlieker, *a. a. O.*, S. 53.
39）オーストリアの歴史認識については以下を参照。古田善文「戦争と歴史認識～戦争被害と戦争加害のはざまで」広瀬佳一編『ウィーン・オーストリアを知るための 50 章』〔明石書店、2002 年 2 月〕、70–74 頁

40） Jabloner u. a.（Hrsg.）, *a. a. O.*, S. 157.